

## 魯迅の『野草』執筆と北京『晨報副刊』

秋吉, 收  
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/9685>

---

出版情報：中国文学論集. 22, pp.67-84, 1993-12-25. 九州大学中国文学会  
バージョン：  
権利関係：



# 魯迅の『野草』執筆と北京『晨报副刊』

秋 吉 收

## 序

「不思議なまでに『野草』と題材を同じくする」、山田敬三氏のこの言葉に象徴されるように、従来、ロシア作家ツルゲーネフの「散文詩」と魯迅の散文詩集『野草』の相似に目を向けた論著は少なくない。<sup>1)</sup>

ツルゲーネフの散文詩は晩年に書き綴られたもので、死や運命といった暗いイメージが全体を覆っているが、魯迅の『野草』も中国社会が五四運動の退潮期から全面戦争へと突入していった時代を背景として、やはり死や暗黒のイメージに貫かれる結果となっている。さらにこのようなそのモチーフ自体の近似に止まらず、両者はもつと具體的にその要素を共有しており、次に挙げるように「ツルゲーネフ散文詩」の数篇は直接に『野草』各篇の材料として指摘することができる。

- ・ 「乞食」 — 『野草』「乞食」材料
- ・ 「世のおわり」 — 『野草』「崩れた線の震え」材料
- ・ 「ほどこし」 — 『野草』「行人」材料
- ・ 「老婆」 — 『野草』「行人」材料
- ・ 「るり色の国」 — 『野草』「美しい物語」材料
- ・ 「何を思うだろうか？」<sup>2)</sup> — 『野草』「死後」材料

紙幅の関係上、ここにその内容を紹介することはできないが、題材の相似に止まらず、夢境に設定された詩が多

魯迅の『野草』執筆と北京『晨报副刊』（秋吉）

いことや軽妙な風刺とかユーモアの要素を合せもつことなど、両者はまさに「不思議なまでに」似通っている。このように、散文詩集『野草』の上には「ツルゲーネフ散文詩」の反映が顕著に見られる。しかし、両者の接点、つまり魯迅が『野草』執筆にあたって、どのような経路で「ツルゲーネフ散文詩」を目にしたかについては、従来の研究においては等閑視されてきた。このことについて魯迅自身は言明していないが、彼は極めて早い時期から英訳本や独訳本、さらには日本留学時代の和訳本を通じてツルゲーネフにも精通していたに違いないというのが一般的な見解である。ロシア語はそれほど堪能でなかった魯迅にとつて、これら翻訳本からの恩恵を多く受けていたことは確かに想像に難くない。しかし小論ではこれら各国語訳よりもむしろ、魯迅が『野草』を執筆していた時期である一九二〇年代の中国語訳に注目した。この「ツルゲーネフ散文詩」の中国語訳は、いままで『野草』との関連考察にあたってはほとんど見落されてきたものである。特に、一九二〇年六月から一〇月にかけて、一挙に五〇篇が訳連載された北京『晨报副刊』紙上の沈頴訳「屠爾格涅夫的散文詩」は、看過できない重要な意義を有する。考察の結果、魯迅の散文詩集『野草』は執筆にあたって「ツルゲーネフ散文詩」ばかりでなく、その掲載紙北京『晨报副刊』自体が寄与していたとの結論を得た。以下、「ツルゲーネフ散文詩」以外の記事から北京『晨报副刊』と『野草』の接点を辿っていくことにする。

一

まず『晨报副刊』紙上より、魯迅が『野草』を執筆する上での材料として用いたと目される記事(A・B・C・D)をピックアップして、実際に『野草』の各篇と比較対照する。あらかじめ確認しておきたいことは、四つの記事がすべて、「ツルゲーネフ散文詩」と極めて近い時期に集中して掲載されていることである。

A. 一九一九年七月三十・三十一日

晨曦「新鬼匯(新幽霊協会)」

B. 一九二〇年五月三日

伊慈瑪伊羅夫「奇異的少年」

《一九二〇年六月十二日～十月九日 「ツルゲーネフ散文詩」連載》

C. 一九二〇年十月二日

散文詩「你爲甚麼愛我」

D. 一九二〇年十月十六日

与謝野晶子「野草」

それではAから順に見ていくことにしよう。一九一九年七月の『晨报副刊』に掲載された「新鬼匯（新幽霊協会）」と題する小説は、『野草』「狗的駁詰（犬の反駁）」（一九二五年執筆）と対応する。はじめに、「狗的駁詰（犬の反駁）」を挙げよう。

わたしは自分がせまくるしい路地を歩いている夢を見た。（中略）

一匹の犬が背後から吠えたてた。

私は傲然と振り返ると、怒鳴りつけた。

「こらっ！ 黙れ！ この権勢にへつらう犬め！」

「へへ！」彼は笑い、続けて言った。「とてもとても、恥ずかしながら人間には及ばねえよ。」

「何だと」私は憤慨した。これはひどい侮辱だと思った。

「お恥ずかしいことよ。俺はとうとう今だに銅と銀の区別を知らねえ。（中略）それに主人と奴隸の区別も

知らねえ。それに……」

私は逃げ出した。

「ちよっと待てよ。もう少し話そうぜ……」やつは後ろで大声で引き止める。

私は一目散に逃げた、懸命に逃げて、やっと夢の中から逃げ出すと、自分のベッドの上に横になっていた。

「新鬼匯（新幽霊協会）」では次のようにある。

ある晩、私はとても疲れたので、ベッドに横になってうとうとしていると、家の犬が突然入ってきた。体を

魯迅の『野草』執筆と北京『晨报副刊』（秋吉）

ピンと伸ばして、二本足で立ち、しかも人の言葉を喋るのだ。私は度胆を抜かれ、慌てて家の者を呼んで、犬を叩きだそうとして、毒づきひっぱたき、長いこと騒いでいたが、あにはからんや、その犬は一向に人を怖がりもせず、相変わらずぶつぶつ言っている。私は家の者を制して、犬が何を言っているのか聞いてみた。口を開くや犬は言った、「(中略)生存競争だよ、優勝劣敗だろ。おれたち幽霊は、おまえら人類を殺さなきゃ、将来おまんまにありつけねえ。(中略)おまえらを殺しつくしゃあ、おれたちや一大統一幽霊国家を建設して、悠悠自適の幽霊生活ってわけよ。」(中略)ふと背後で誰かが私を押しながら何か言っているのが聞こえた、「もう朝ですよ。まだ起きないの。」そこでやっといま見たことはなんと一場の夢であったことに気付いたのだ。

両篇ともに人の言葉をしゃべる犬に出会い、始めは嘲罵するが結局逆に遣り込められてしまうという同じ筋書きである。夢の中の出来事、そして最後に主人公が夢から醒めるという設定も一致する。<sup>7)</sup>

次に、記事のB。一九二〇年五月三日、「ツルゲーネフ散文詩」訳連載の約一カ月前に掲載されたロシア作家イツマイロフの「奇異的少年(奇異な少年)」と題する小説である。これは、『野草』「立論(意見発表)」(一九二五年執筆)と対応する。「立論(意見発表)」にはこう記す。

ある家に男の子が生まれて、家じゅうが大喜びしていた。満一ヶ月のお祝いに、抱きかかえてきて来客に見せた。——もちろん、なにか縁起のいいことを言ってもらいたかったのであろう。

ある人は、「この子は将来きつと金持ちになりますよ」と言った。  
そこで、この人はとても感謝された。

ある人は、「この子は将来きつと役人になりますよ」と言った。

そこで、この人は少しばかり愛想のいい言葉を聞かされた。

ある人は、「この子は将来きつと死にますよ」と言った。

そこで、この人は家じゅうの者から袋叩きにされた。

「奇異的少年(奇異な少年)」では次のようにある。

以前一人の奇異な少年がいた。彼は天賦の美しい容貌と、すぐれた記憶力、そして探求心に富んだ智能を有し、誰もが彼をとて可愛がった。(中略)多くの人が言葉を尽くして彼を褒め讃えた。

「この少年は将来必ずや著名な学者になるだろう。そして科学の分野で新しい方法論を開拓するだろう。」別の一人がそれに反対した、「いや、彼は将来必ずや聡明な作家になるだろう、その人物描写がどんなに見事なものか想像もつかないほどだ！」(中略)

さて彼らはそこで論ずることをやめ、ただ黙って考えた、なぜならこの少年には何かしら感覚の欠乏したところがあることに気が付いたからである。

そして互いにこっそり囁いた、「この少年の智能は確かにすばらしいが、心があまりに狭い。」<sup>(8)</sup>

この二篇は、最初の二人が口を極めて子供を誉めるが、最後にはけなすという筋立てが一致している。次に記事のC。一九二〇年十月二日、つまり「ツルゲーネフ散文詩」訳連載中に同紙に掲載された周作人訳「散文詩二篇」の最初の詩「你爲甚麼愛我」である。これは、『野草』「影的告別(影の告別)」(一九二四年執筆)と対応する。「影的告別(影の告別)」では次のようになっていいる。

人が眠り込んで時間もわからないときになると、影が別れを告げにきて、こう語りかける——  
(中略)

わたしは暗黒の中をめざして地のないところをさまよおう。

おまえはなおも、わたしに贈り物を求める。わたしはおまえに何を与えることができよう。あるとすれば、やはり暗黒と空虚だけだ。

(中略)

わたしはただ一人、遠くへ行く。おまえもいなければ、別の影もない暗黒のなかへ。わたしだけが暗黒に沈められ、世界はすべて私自身のものとなるのだ。

次のは、「散文詩二篇」の第一篇の詩である。

あなたが夢想していると、一人でああなたの耳元へやってきてさきやくの？

魯迅の『野草』執筆と北京『晨报副刊』(秋吉)

わたしには何も無い、愛撫もなければ、口づけも。……わたしには何一つない！

(中略) わたしが愛するのは暗黒と孤独。わたしは永久に旅することを願う、……わたしはそこで朽ち果ててしまふだろう、孤独にしかも忘れ去られて。(中略)

行きなさい……そこであなたはあなたの春を手に入れることができる。

ここに『野草』と対照して挙げた『晨报副刊』掲載の三篇は、従来の研究において一度も取り上げられたことはない。これらの作品をただちに魯迅の『野草』と関連ありと断定はされないが、そのイメージや構成が似通っていることは否定し得ない。さらに、これらがすべて、魯迅が『野草』執筆の過程で明らかに影響を受けたとされる「ツルゲーネフ散文詩」連載と時を接して、やはり同じ『晨报副刊』の上に掲載されていることは注目せざるを得ない。

最後に記事のDを検討しよう。四ヵ月にわたった「ツルゲーネフ散文詩五十篇」連載が完結したちようど一週間後の一九二〇年十月十六日、同紙に与謝野晶子の詩が、魯迅の弟周作人によって翻訳掲載された。奇しくもその詩のタイトルは「野草」という。

野草

雑草(原詩)<sup>10</sup>

野草眞聰明呵、

雑草こそは賢けれ、

在野裏城裡、留下了人的走路、

野にも街にも人の踏む

青青的生著。

路を残して青むなり。

野草眞公正呵、

雑草こそは正しけれ、

什麼窪地都填平了、

如何なる窪も平かに

青青的生著。

圓く埋めて青むなり。

野草眞有情呵、

雑草こそは情あれ、

載了一切の獸蹄鳥跡、  
青青的生著。

獸のひづめ、鳥の脚、  
すべてを載せて青むなり。

野草眞可尊呵、  
不論雨天晴天、總微笑著、  
青青的生著。

雜草こそは尊けれ、  
雨の降る日も、晴れし日も  
微笑みながら青むなり。

ここにひっそりと雜草のごとく掲載されたこの詩もやはり何らスポットを当てられたことはない。魯迅の散文詩集『野草』と関連付けられたことももちろんない。しかし、これまで見てきたような散文詩集『野草』と『晨报副刊』との関係を前提に考えるとき、「ツルゲーネフ散文詩」連載完結の一週間後に掲載された「野草」と題するこの与謝野晶子の詩は、魯迅の『野草』考察の上でその関連を考えさせてくれる資料である。

魯迅の散文詩集『野草』は野草と命名されていながら、詩各篇のうちには具体的に野草を詠み込んだものはない。それにもかかわらず、この一連の作品は、一九二四年の雑誌『語絲』連載当初から一貫して「野草」の標題のもとに書き継がれたものであった。つまりとて、魯迅にとってその一篇一篇が「一叢の野草」であったのである。二十三篇を総括して書かれた「『野草』題辭」において、彼はこれら「野草」に託した懐いを次のように披瀝している。

野草は根が浅く、花も葉もきれいではない。それでも、露を吸い、水を吸い、古い死者の血と肉を吸って、それぞれに自分の生存をかちとっている。その生存とても、いずれは踏みつけられたり刈り取られたりして、あげくに死滅と腐朽にいたるのだが。（中略）私は自ら私の野草を愛する。（中略）私はこの一叢の野草を、光と闇、生と死、……愛するものと愛さない者の前にささげて証とする。

さて、詩「野草」にも見たように与謝野晶子は生涯、この野草つまり雑草には特別な思い入れをしていたようである。一九一六年に出版された評論集『人及び女として』にはやはり「雑草」と題された次のような短文が収められている。

魯迅の『野草』執筆と北京『晨报副刊』（秋吉）

雑草が庭に殖えて行く。私は一方の庭だけを雑草に任せて抜き取らずにある。そして毎朝顔を洗ひながら目を遣つて居ると、雑草と云つて疎かにして居たものがいろいろの意味で心を惹く。人に知られた木や草花は新しい刺戟に乏しいが、雑草は第一その名からして私には研究課題である。私は雑草の持つて居る風情や姿態を歌つて一冊の集にしたいと思つて居る。<sup>12)</sup>

雑草を歌つた一冊の集というのほもちろん魯迅の散文詩集『野草』を指して言つて居るわけではない。魯迅の『野草』執筆の十年前に与謝野晶子はこのように構想していたのである。しかし、興味深いことに、魯迅は散文詩集『野草』執筆以前に、この与謝野晶子の短文「雑草」を目にしてた可能性が強い。<sup>13)</sup>後に詩集『野草』を編むことになる彼は、この短文をどのような思いで読んでいたのだろうか。従来、『野草』という題そのものの来源については確固たる論及はなされていないが、与謝野晶子の雑草に見たように、魯迅はこの『野草』という全体のモチーフそのものについても、『晨报副刊』の上にその着想を得ていたのではないだろうか。

以上、小論にてその『野草』との対応を考察してきた『晨报副刊』上の記事（『野草』材料案）に、『晨报副刊』上に記載された「ツルゲーネフ散文詩」を含めて列挙すると、次のようになる。

一九一九年七月三十・三十一日

晨曦「新鬼匯（新幽霊協会）」——『野草』「狗的駁詰」材料

一九二〇年五月三日

伊慈瑪伊羅夫「奇異的少年」——『野草』「立論」材料

一九二〇年六月十二日〜十月九日

ツルゲーネフ散文詩五〇篇連載

「乞丐」

——『野草』「求乞者」材料

「世界的末日」

——『野草』「頹敗線の顫動」材料

「施物」

——『野草』「過客」材料

「老嫗」  
「淺藍的世界」  
「我將要想什麼？」  
一九二〇年十月二日  
散文詩「你爲甚麼愛我」  
一九二〇年十月十六日  
與謝野晶子「野草」

——『野草』「過客」材料  
——『野草』「好的故事」材料  
——『野草』「死後」材料  
——『野草』「影的告別」材料

同時期の同じ出版物の上にこれほどの『野草』の材料が一つところに揃って出現していることは驚きである。魯迅は『野草』執筆にあたっていわばネタ本として、「ツルゲーネフ散文詩」が訳連載された当時の『晨報副刊』を周辺に拡げ、眼を走らせていたのではないだろうか。

二

さて、それでは魯迅は實際この肝心の『晨報副刊』を読んでいたのだろうか。魯迅は一九一二年から二六年にかけて役人として北京に居住しており、この北京の『晨報副刊』とは極めて身近な存在にあった。彼は一九二一年九月に、周作人に宛てた手紙紙のなかで次のように述べている。

中秋節は月が出なかった。今日は『晨報』も休みだ。

この記述は「ツルゲーネフ散文詩」連載の一年後に当たるが、魯迅は『晨報』を目にしていたばかりでなく、ふと洩らされたこの言葉には、『晨報』に対する彼の深い関心さえも感じられる。

魯迅の『野草』執筆と北京『晨報副刊』（秋吉）

さらに次のは、「ツルゲーネフ散文詩」訳連載前後に同じく北京『晨报副刊』に掲載された魯迅の執筆である。

一九一九年三月…「狂人日記」(『新青年』からの転載)

一九一九年十二月…「一件小事」(小説)

《一九二〇年六月十月…「ツルゲーネフ散文詩」五〇篇連載》

一九二一年四月…森鷗外「沈黙之塔」訳載

一九二一年五月…「生降死不降」(雑文)

芥川龍之介「鼻」訳載

「名字」(雑文)

一九二一年六月…芥川龍之介「羅生門」訳載

一九二一年十二月～二二年二月…「阿Q正伝」連載

「ツルゲーネフ散文詩」訳連載前後に、魯迅もまた自分の著述または翻訳をこのように数多く同紙に掲載している。彼はそこに処女作「狂人日記」を『新青年』から転載しており、さらに、代表作「阿Q正伝」の筆を執ったのも、この『晨报副刊』においてであった。魯迅が当時『晨报副刊』をいかに重視していたかが窺える。これらの事実を踏まえても、彼が『晨报副刊』に訳連載された「ツルゲーネフ散文詩」を読んでいた可能性は否定できかねる。

ところで、この『晨报副刊』上の四ヵ月にわたる「ツルゲーネフ散文詩」訳五〇篇一挙連載は、当時の文壇において一大イベントであった。マルクス学説等の思想関係では長期にわたった連載も見られたが、一つの文学作品がこれほど集中的に取り上げられたのは稀で、『晨报副刊』の紙面でも際立っている。だがその反響はといえば芳しいものではなかった。『晨报副刊』以外でも盛んに翻訳紹介はされていたが、当時ツルゲーネフの「散文詩」は、とくに詩の形式上の改革を推進するために利用された傾向が強く、内容自体に対する積極的な評価は認められない。当時の文壇の冷淡な様子は、連載紙『晨报副刊』記者の次の言葉からも窺える。

以前本紙にこの五〇篇の散文詩を掲載した時、一体何人いたかはわからないが、あるいは面と向かって、あ

るいは書面で、ある者は意味がわからないと控えめに言い、ある者はまったく価値がないと尊大ぶって言い、総じて言えば本紙に掲載したこの五〇篇の散文詩に対して絶対的な不満を表明したのである。<sup>16)</sup>

ツルゲーネフの「散文詩」は晩年に書き綴られたもので、その内にはアフォリズム的なものから、断片的な感慨にすぎないものまで、極めて多彩な要素を含むが、はじめ作者によって *Senilia* (老いたる言葉) と名付けられているように、孤独感や死の恐怖といった響きが全編を貫いている。死や暗黒にくまどられたベシミスティックな意境は、革命を声高く叫ぶ若ものたちの胸には反応しなかったであろう。

このようにツルゲーネフの「散文詩」を白眼視した当時の文壇に対して、魯迅、周作人の兄弟は一定の距離を保っていた。魯迅が初めて直接ツルゲーネフに言及したのは、『魯迅全集』で見える限り、一九二〇年十月三〇日、彼が『新青年』に訳載した同じロシアの作家アルツイバーシェフの小説「幸福」の訳者付記の中である、

(アルツイバーシェフは、)彼の「サーニン」への非難に対して、(中略)このことを以前のツルゲーネフの「父と子」(に対する非難・秋吉注)に比しているが、私はそれは間違っていないと思う。<sup>17)</sup>

魯迅は高く評価していたアルツイバーシェフを、ツルゲーネフと同じ立場と見做しているが、つまりツルゲーネフの卓越性は彼の中ではすでに前提となっているのである。ここに「散文詩」の文字は見えないが、魯迅が初めてツルゲーネフに言及したこの一九二〇年十月三〇日とは、『晨报副刊』の「ツルゲーネフ散文詩」訳連載が完結したちょうど二週間後に当たっており、魯迅の脳裏には、二週間前に四ヵ月にわたる訳連載を終えたばかりの「散文詩」五〇篇の存在が失せているはずはない。

また、周作人は一九二一年七月に、やはりこの『晨报副刊』に掲載した雑感文「宣伝」のなかで次のように述べている。

進歩を促すような意見はすべて、大衆から非難されないものはない。(中略)かつて『新青年』に掲載された一篇の小説「藁」や、本紙に掲載されたツルゲーネフ散文詩の中の「白い手の人と労働者」はその良い例である。

ここで周作人は魯迅の小説「藁」とツルゲーネフの散文詩を並列させ、高く推奨する。さらに、当時魯迅と周作

人は北京に同居しており、生活上と文学活動上の両面で当時形影相随う弟周作人のこの言葉はまた魯迅の意見をも反映していると言える。<sup>19)</sup>

次に挙げるのは、魯迅の死後に、その弟子でしかも当時北京『晨报副刊』の編集者として魯迅に「阿Q正伝」執筆を慫慂した事でも知られる孫伏園が語ったものである。

魯迅先生は私に言われたことがある、「西洋文藝の中にも「葉」に類する作品がある。(中略)ロシアのツルゲーネフの五〇篇の散文詩に「労働者と白い手の人」というのがあるが、そのモチーフはやはりよく似ている。<sup>20)</sup>

魯迅の小説「葉」には、処刑された革命家の血に浸した饅頭が、肺病に効くと信ずる民衆の蒙昧さが描かれているが、ツルゲーネフの散文詩「工人和白手の人」には、革命家の絞殺に使われた縄を手に入れば幸福が訪れると信ずる労働者が描かれている。この散文詩には特に労働者に却って愚弄される革命家の姿が生き生きと描かれており、自身、先覚者の悲哀を嘗め尽くした魯迅の共感を呼んだのである。孫伏園のこの記述からも、魯迅がツルゲーネフの五〇編の散文詩に精通していた様子が窺われる。また、『野草』ではないが、ここで自作と「ツルゲーネフ散文詩」のモチーフの相似に自ら言及していることも興味深い。

『晨报副刊』と魯迅といえ一般に一九二一年から二二年にかけての「阿Q正伝」連載がすぐに想い起される。だが魯迅の散文詩集『野草』執筆にあたって、この文藝新聞は看過できない位置を占めていたのである。

## 結

魯迅の散文詩集『野草』の幾つかの作品に、執筆の上での材料が存在したことは、近來の研究によって少しずつ明らかになってきている。魯迅はなぜ自己の唯一の新詩集『野草』にこれ程多くの材料を求めたのだろうか。なぜ他作の羈絆に囚われない自由な創作の筆を揮わなかったのであろうか。そこには何らかの意図がはたらいていたのかもしれない。例えば文壇に膾炙していた「ツルゲーネフ散文詩」を下敷きにすることで効果をねらったなど。<sup>21)</sup>

ともと伝統的な中国文学、とりわけ詩作においては『詩経』や杜甫を始めとする先人の詩句を典故として用いるのが一般的であった。だが、周知のように次第に詩壇は他作からの模倣、モザイクに墮し、何らの新鮮な要素をもそこに盛り込むことはできなくなっており、当時、そうした文壇の死水からの脱却をはかって胚胎したのが新詩運動であった。そしてそれは自然な心情の発露を標榜していたのである。魯迅は西欧の進んだ芸術を導入することに積極的であったから、『野草』はその実践であると言え、それまでもかも知れない。魯迅自身が詩に言及するとき、彼はいつも不自然なまでに謙虚である。彼の唯一の新詩集『野草』が純粹な創作とは言えない事実に鑑みたとき、彼はひょっとすると本当に詩、特に新詩には自信が無かったのではないか、こんな試論も成り立つかも知れない。これらの事についてはすべて今後の研究の課題としたい。

\*

さて、これまで魯迅の側からばかり見てきたが、やはり戦乱の日本にいた与謝野晶子もまた中国そして自分達と同じく時代の波にもまれる中国の文人たちに遙か思いを馳せていた。日本軍による中国侵略の本格的発動となった一九三二年の上海事件を嘆じて彼女は次のような詩を詠んでいた。

上海事件

魯迅と、郭沫若と、

胡適と、周作人と、

かれらとわたしらのあひだに

塹壕は無いのだけれど、

重砲が響(こ)にしてしまふ。

魯迅と与謝野晶子を結ぶ野草の根はこれほどにも深かったのである。

魯迅の『野草』執筆と北京『晨報副刊』(秋吉)

注

(1) 山田敬三「魯迅の世界——『野草』の実存主義——『魯迅の世界』(一九七七年、大修館書店刊) 三〇一頁。山田氏論文の他、小論執筆に当たって参照した論著(「ツルゲーネフ散文詩」と『野草』の關係に言及したものは次の通り)。

・ 溶「屠爾格涅夫和魯迅」一九三五年九月『天南』(上海) 第三期(一九八五年、中国文聯出版公司刊) 『魯迅研究學術論著資料匯編』第一卷所収、一一四—一頁。

・ 孫玉石著『『野草』研究』(一九八二年、中国社会科学出版社刊) 二一—六頁。

・ 閔抗生「《求乞者》・《乞丐》・《施舍》——『野草』與屠格涅夫《散文詩》比較研究之一」中国社会科学出版社刊『魯迅研究(双月刊)』一九八四年第四期。

・ 閔抗生「《好的故事》與《蔚藍的國》比較賞析」『名作欣賞』一九八四年第二期。(『復印報刊資料・魯迅研究』一九八四年第五期所収)。

・ 閔抗生「《希望》・《老人》——『野草』與屠格涅夫散文詩比較研究之三」『文科通訊』(淮陽教育學院) 一九八四年第一期。(『復印報刊資料・魯迅研究』一九八四年第八期所収)。

・ 黃健「《野草》與屠格涅夫的散文詩」『江西社会科学』一九八五年第二期。(『復印報刊資料・魯迅研究』一九八五年第六期所収)。

・ 吳小美「《野草》與《愛之路》——對魯迅與屠格涅夫的幾點看法」一九八七年、中国社会科学出版社刊『文学評論叢刊』第二九輯。

・ 王澤龍「屠格涅夫與魯迅散文詩的悲劇美」『外国文学研究』一九八八年第二期。

(2) ツルゲーネフ『散文詩』の邦訳は、岩波文庫(神西清・池田健太郎共訳、一九五八年版)によった。

(3) 「散文詩」の各篇の翻訳は一八九七(明治三〇)年北村透谷訳「麻雀」に始まり、詩集では一九一〇(明治四三)年草野柴二訳『散文詩』を嚆矢とする。魯迅は日本留学時代からツルゲーネフに注目していた。周作人「關於魯迅之二」に「那時日本翻譯俄國文學尚不甚發達，比較的紹介得早且亦稍多的要算屠介涅夫，我們也用心搜求他的作品，但只是珍重，別無翻譯的意思。每月初各種雜誌出版，我們便忙着尋找，如有一篇關於俄文學的紹介或翻譯，一定要去買來，把這篇拆出保存，」とある。

(4) 魯迅は日本留学時代にロシア人からロシア語を習ったことがあったが、結局身につけるまでには至らなかったようである。前出周作人「關於魯迅之二」に「丁未年(一九〇七)同了幾個友人共學俄文，(中略)教師名孔特夫人(Maria Konde)，(中略)四人暫時支才撐，卒因財力不繼而散。」とある。

(5) 『野草』との比較対照にあたって参照引用される「ツルゲーネフ散文詩」は、一九五〇年代の巴金訳か、そうでなければ八〇年代の翻訳である。

(6) 晨曦「新鬼匯(新幽靈協會)」、原文は次の通り：

有天晚上，我精神疲倦。躺在床上小睡。我家一只狗，忽然跑進來。豎起身子，用兩只腳站着。學人說話。當下我嚇了一跳。急喚家人，將那狗罵出去。不想又罵又打，鬧了半天，那狗並不怕人。口裏還是亂說。我便教家人暫且住手，聽那狗說些什麼。開頭一句那狗便說。「(略)因爲生存競爭，優勝劣敗。我們鬼類，若不害死你們人類，將來自己都沒有飯吃。(中略)殺盡你們，我們便好建設個大一統的鬼國家。安心樂意，過鬼生活。(略)」忽聞背後有人推我叫道。「天不早啦。還不醒來。」(中略)我方知先時所見。乃是南柯一夢。

・『晨報副刊』は、人民出版社一九八〇年影印本を使用した。

(7) 筆者は前稿「徐玉諾と魯迅—散文詩集『野草』をめぐる」(『中国文學論集』第二一号、一九九二年十二月、九州大学中国文学会)においてこの魯迅の「狗的駁詰」執筆の材源として徐玉諾の散文詩「可怕的字」を指摘したが、『晨報副刊』上のこの小説「新鬼匯」も着想上の材源の一つと言えるのではないだろうか。

魯迅の『野草』執筆と北京『晨報副刊』(秋吉)

(8) 伊慈瑪伊羅夫「奇異的少年(奇異な少年)」、原文は次の通り：

従前有一位奇異的少年。天賦的美麗、強大的記憶力、好研究的智能。衆人都很愛他。(中略) 有許多人竭力讚美他。

「這個少年將來必要作一位著名的學者。在科學裏開一條新的路徑。」

另一個人抗声道：「不對，他將來必要作一位穎悟的著述家還不知道將人物描寫的怎樣細緻呢！」(中略)

他們也不評論了，只靜靜想，因為覺察出這位少年有些感覺缺乏的地方。互相悄悄的說道：「這位少年的智能很大，然而心胸很窄」

(9) 仲密(周作人)訳「散文詩二篇」(其一「你爲甚麼愛我」)、原文は次の通り：

當你正在夢想的時候、獨自來到你的耳邊私語麼？

我一點都沒有、也沒有愛撫、也沒有接吻。……我是一無所有！

(中略)我所愛的是暗黒與孤獨。我願永久的游行、……我會在那裏朽腐了、孤獨而且被忘却。(中略) 你可以去、……在那裏你可以得到你的春天。

(10) 与謝野晶子「雜草」 第六評論集『若き友へ』所収、一九一八年、白水社刊、二〇九頁(初出は一九一八年二月二十四日『横浜貿易新報』)。この詩は下つて一九二一年八月の『新青年』九卷四号の周作人訳

「雜訳日本詩三十首」中に再度掲載される。「雜草」は周作人によつて「野草」と漢訳された。魯迅の

『野草』は從來『野草』と和訳されてきたが、あるいは『雜草』と訳すべきかもしれない。

(11) 「『野草』題辭」 一九二七年七月『語絲』第一三八期。

(12) 「雜草」『人及び女として』(一九一六年、天弦堂書房刊)六一頁。

一九一九年に出版された第七評論集『心頭雜草』は、標題から見れば与謝野晶子の「雜草集」構想の一つの実現と言えるかもしれない。だがその内容は当時の社会批評中心であつて、彼女の愛した雜草を歌つたものではない。

(13) 中国においては、与謝野晶子はむしろ歌人もしくは詩人としてより、女性開放の思想を封建中国に齎らし

た文人として著名である。『晨报副刊』紙上の詩「野草」掲載に遡ること二年あまりの一九一八年五月、『新青年』四巻五号に掲載された与謝野晶子著「貞操論」（周作人訳、原題「貞操は道德以上に尊貴である」）は、文壇に甚大なる反響を与えた。これに呼応して七月発行の五巻一号には胡適の「貞操問題」が掲載され、これ以後婦人開放論議が急速に盛んになってくるのである。この「貞操論」を訳載した周作人の兄魯迅もやはり与謝野の主張につよく共鳴した一人であった。彼も「貞操論」掲載に直ちに呼応して五巻二号に「我之節烈観」を発表し、与謝野の論を敷衍して、婦女子を食い物にしてきた中国社会の現実を暴露した。この「貞操論」、つまり「貞操は道德以上に尊貴である」を収める評論集『人及び女として』の中には、前出の短文「雑草」をも収める。

(14) 魯迅「致周作人」（一九二二年九月十七日） 『魯迅全集』第十一巻（一九八一年、人民文学出版社刊）四〇六頁。

(15) この時期に『晨报副刊』紙上にニーチェの紹介記事が大きく取り上げられていることも注目される。「ツルゲーネフ散文詩」連載開始の直前から連載と重複する時期にかけて（一九二〇・四・十五〜六・十七）三十四回にわたって「尼采（ニーチェ）之一生及其思想」が連載され、さらに同年十一月四日から八日にかけては「尼采的超人思想」が掲載される。

(16) 訳者の沈頴は当時『晨报副刊』を舞台に活躍していたロシア文学翻訳家で、ツルゲーネフ作品の翻訳以外にもプーシキンやチェーホフの作品を次々と訳出発表していた。しかし彼はその中でもこの「ツルゲーネフ散文詩」訳載にはとりわけ自負するところがあった。連載の初回に自ら序文をしたため、更にこの訳業に限って特に「拙俄文原本訳」と注記までしている。だがその結果は、記者の言葉に見られるとおりであった。あれほど精力的に訳業に励んでいた沈頴は、「散文詩」連載終了後、わずかに一編の小説を翻訳しただけで姿を消している。

(17) 魯迅「アルツイパーシェフ『幸福』訳者付記」一九二〇年十月三十日筆、一九二〇年十二月『新青年』八巻四号。

魯迅の『野草』執筆と北京『晨报副刊』（秋吉）

- (18) 記者「工人與白手的人」 『晨报副刊』一九二一年七月十八日。
- (19) 周作人は一九二一年十一月にはやはり『晨报副刊』にボードレールの「散文小詩」六篇を訳載しているが、『晨报副刊』以外にもこの時期の彼の新詩ひいては散文詩への傾斜を『新青年』や『小説月報』のうえに跡付けることは難しくない。もともと彼は「ツルゲーネフ散文詩」が紹介される以前の最も早い時期から劉半農等とともに散文詩に取り組んでおり、彼の魯迅に与えた影響は見逃せない。
- (20) 孫伏園「魯迅先生的小説―談『菜』―」一九三六年二月一日『宇宙風』第三〇期。
- (21) この点について、福岡大学の甲斐勝二先生よりご教示を得た。
- (22) 与謝野晶子「上海事件」一九七六年、文泉堂出版社刊、『与謝野晶子全集』第七卷、三九六頁。なおこの詩は連作『花と雑草』に収められている。

〈追記〉小論は、一九九三年五月に熊本商科大学で開催された平成五年度九州中国学会大会における口頭発表に基づくものである。